

『天使と家族になりました』

著：川琴ゆい華

ill：明神 翼

満天の星空の下で、ルルを真ん中にして露天風呂に入った。

三人で一緒に入浴するのははじめてだ。しかもこんな最高のロケーションで。

家では瑞生がルルをお風呂に入れていた間に二ナが食事の後片付けをしていたり、その逆だったり、慌ただしい時間だった。

「あ〜、もっと早く、こういうところ探せばよかったなあ」

「俺も瑞生も毎日必死だったし。瑞生は、昼は動物病院、夜はもののけ病院で忙しくて」

日々を過ごすので精いっぱい、あっという間に一年が経ってしまう。

「一年しかないってこと、もっとちゃんと考えるべきだったよ……」

何がいちばん大切だったかも、日々が過ぎてしまってから分かったりするものだ。

でもそんなふうに振り返ってもしかたない。今日ここに三人で来られてよかったと、今はそんなしあわせに浸っていよう。

「こういうところ来てゆったりすると、こんな癒やしが必要だったんだって実感する」

「みずはちゃんと恋人つくったらいいと思う」

ルルのキューピッドらしい発言に、瑞生は噴き出した。

「行きに『ドライブデートもしたことない』とか話したから？ ワーカホリックは恋人に癒やしてもらったらいいよ、とかそういう話？」

「いいかんじのイケメン、ここにいるよ」

ルルはにこにこしながら二ナを指さしている。

二ナは目を大きくして、瑞生は「ええっ」と声を上げた。

「相性いいよ。口下手で、てれやさんだけど。浮気しないし」

二ナが「ルルー……」と困り声を上げる。

見た目二歳児くらいの子どもの容姿なのに、人を紹介するセールスポイントのひとつが「浮気しないし」はどうかと思う。

「ルルはぼくらの性別を分かってなかったのかな？」

「オスとオス。でも天使はオスもメスも両性も関係ないよ」

「えっ、関係ないのっ？」

驚いて瑞生は二ナを見た。二ナは控えめにうなずいている。

「えっ？ ちょっと待って。でも、オスとメスが交尾した結果、たまごができるんだよね？」

で、なんかよく分かんない仕組みだけど、『キューピッドの木』の股からたまごが産まれるんじゃないかなかったっけ？」

出会った日、そんな説明を受けたと記憶していたが。

混乱気味の瑞生の問いに、ルルが得意げに答えてくれる。

「ふたりの『愛の種』で『キューピッドの木』にたまごができるんだって」

二ナに教えてもらったというルルの説明に、瑞生は絶句した。

「……愛の種？ 精子と卵子じゃないの？ 交尾関係ないの？」

二ナは「交尾したら飛び出す」なんて乱暴な説明をするから、瑞生は「と、飛び出すっ？」と目を瞬かせる。すると今度は、ルルが眸をくるんと大きくして言った。

「心にある、愛の種だよ」

「……つまり、性別に関係なく、愛の種があればキューピッドのたまごができちゃう……ってこと？」

瑞生の問いに今度は二ナが応じる。

「でも百パーセントの確率でたまごができるわけじゃない」

「それに、天使は一生にひとりしか愛さないんだよ。そういう生き物なの」

ルルがつけ加えた言葉で、瑞生に衝撃が走った。

——じゃあ、二ナはこれから先、ほんとうにはもう誰も愛さないってこと？

心臓が痛いくらい、ずきんとしてしまった。頬がひきつり、うまく笑えない。顔のあちこちがこわばる。

「……え？ じゃあ天使の発情期は、愛がなくても愛があるフリができるってことじゃない？」

「ひとりしか愛さないっていうのはちょっと極端に言いすぎ。まったく愛せないってわけじゃない」

二ナのフォローを聞いても、「じゃあ、よかった」とは思えない。つまりこれから先、誰も二ナの生涯でいちばんにはなれないことに変わりはない。

不特定多数とつがう天使もいると二ナが以前話していたが、そんな天使も、心から愛しているのはたったひとりということになる。もともとあっちにこっちに移り気な性格より、全員愛すると嘯くより、瑞生からしたらその心のほうが残酷な気がした。

——なんでこんなにショックなんだ。

「二ナは瑞生に超おすすめだよ。恋はキューピッドの手のひらの上にあるんだ。だからルルに任せて！」

「キューピッドの手のひらの上？」

ルルの話している意味がよく分からない。二ナに詳しい説明をお願いした。

「恋愛はキューピッドの気まぐれによるところ、キューピッドの思いどおりに恋がかなえられることもある……っていう意味」

自身の恋愛事情をルルに暴露された二ナは、やや複雑な表情を浮かべて、そう話してくれた。

「ルルが恋をかなえるキューピッドになるから、瑞生、待ってて」

ルルは瑞生に抱きつきながら、無垢な目で訴えてくる。

子どものルルは素直で悪気がない。

二ナが恋をした人は、今はもう傍にいない。でも今後、誰も二ナのいちばんにはなれないということも分かっている。『それでもなおおすすめしたくなるくらいほんとうに最良物件』だと言いたいのかもしれないが。

瑞生は波立った気持ちはどうにか隠して、無邪気なルルに微笑んだ。

二ナが声を尖らせて「ルル、瑞生が困ってる」と窘めようとするものの、ルルは「ほんとだよ」と繰り返した。

——天使ってもっと清廉なイメージだったから？ なんだろ、このもやっ后感。二ナにとってのいちばんにこの先もぜったいになれないですけどね、と前もって宣言されてるも同然だし。

さっきから胸のずきずきがとまらない。とまらないどころか、大きく深くなっていく。

いちばん愛した人とは結婚できなかつたとしても深い絆でつながっている夫婦や、それと似た関係の恋人たちだっている。そこに愛がないわけじゃない。そういう愛のかたちだっているってことは頭で理解できるけれど。

そのとき、瑞生たちの頭上で、星がひとつ流れた。

「あっ、流れ星！」

指をさすルルの声。燃えさかる星がすいっと消えた瞬間、心に浮かんだのは。

——ようするにぼくは、自分がいちばん愛されたがってるってだけなんじゃ……？

流星が消え、ふらりと二ナのほうへ顔を向けると、二ナは星ではなく瑞生を見ていた。

飛翔練習のあとの露天風呂でだいぶ体力を消耗していたルルは、今はキングサイズのベッドですやすやす眠っている。

今日は三人並んで、このベッドで寝る。一緒に寝るのは二ナとルルがやってきた日以来だ。

——あのときはついうっかり、ぼくが二ナのほうのふとんで寝ちゃったから。

横臥した二ナと瑞生の間でルルは右に左にと転がって、俯せになった今は背中中の羽がぴくぴくしている。ルルがたまごから生まれたときのことを思い出して、瑞生はくすりと笑った。

「ほんとかわいいなあ。ルルの羽とか、ぐーにした手とか、むにゅっとしたくちびるも」

瑞生が羽をなでるとルルは「ふにゃ、むにゃ」と何かを言いながらごろごろ動き回る。飛翔練習の夢でも見ているのかもしれない。最終的に頭と足の位置が逆さまになった。

「でも寝相はすごく悪い」

二ナは微笑んで、ルルのぷっくりしたふくらはぎを指でやわくつまんでいる。

二ナのやさしい目元を思わずじっと見つめた。子どもを愛する親の顔だ。

三人で流れ星を見て、最後に目が合ったとき、二ナの眸は星屑を映した深い湖面みたいにとても静かに、だけど熱く、雄弁に、瑞生に何かを語っていたような気がした。

——何か、は分からなかったけど……。

瑞生はもののけたちの姿は見えるのに、人の言葉しか聞く耳がなくて、ましてや心の声なんて聞こえない。

二ナのほうはもののけたちの声だけじゃなく、表情や息遣いでもその個体から湧き出た感情を解釈できてしまう。

——もしかして、二ナになんか伝わっちゃってる……？

自分の中でしっかりと整理も把握もできていないのに、降って湧いたような不可解な感情にち

よっと驚いているというのに。

——前の相手のこと、ほんとうは訊きたいけど、訊かれるのやだろうし。

出会った当初、二ナから言いたくないとの意思を示されて、それについてふれないようにしてきた。

どんな相手だったのか想像もつかなかったし、ルルを育てる間は、その相手について知らなくてもなんの弊害もなかったけれど、さっきから気になってしかたなくなっている。

——もう……ルルが変なことばかり言うからだ。

何かを打ち消すように目を伏せた。ちょっと前から、なんだか自分はおかしいのだ。ルルがいなくなることや、二ナが働き始めてふたりとの時間が減ったのを寂しいと思うのはしかたないとしても。

今度は、トリマーのすみれさんに牽制したことを思い出した。この小旅行は、あれがきっかけだ。

「瑞生……」

眠るルルを気遣っているのか、静かな声で名前を呼ばれて瑞生は目を上げた。

二ナと向かい合ったまま視線が絡む。一瞬で深く、搦め捕られたような心地がする。

「……瑞生、泣きそうな顔してる」

気遣う二ナに、「そう？」と返したけれど、なぜだか眸が勝手に涙を浮かべた。

どんなにあがいても、ルルはあとひと月もすれば天界へ帰る。

二ナは着々とお金を貯めて、いずれ出て行く準備をしている。恋心を天界に置いてきた天使は意外にも薄情で、もう誰も深くは愛さない。二ナに瑞生への感謝の気持ちはあっても、瑞生が抱えているほどの想いはない。それを知ったからますますショックを受けている。

愛がある分、愛されなければ、虚しさを覚えてしまうものなんじゃないだろうか。だってそれでもいいと軽く言えるほど、強い人間じゃないし、案外自分が欲張りなのだど気付かされることが続いているのだ。

——あれっ……ぼく……、二ナに……恋してるんじゃない？

出会って一年。家族みたいに暮らして、情が湧くのは当然だと思っていた。でもさっきから瑞生が考えているのは家族に対する愛があるからではなく、恋愛感情ではないだろうか。

二ナが、瑞生の髪をくすぐるように梳いて、ゆるやかになでてくれた。

——うわっ……。二ナの、癒やしの手だ。

なぐさめられているというより、愛しいものにふれるみたいにされている。

ぶわりと、瑞生の胸に熱いものが広がった。とても甘くて、痛くて、苦しい。そんな複雑な情動を、もしかすると生まれてはじめて感じているのかもしれない。

まだ不確かな感情が飛沫を上げる。

そのとき、なんともいえない甘美なおいを嗅ぎ取った気がして、瑞生はすんと鼻を鳴らした。

思わず目を閉じ、さらに深く、鼻腔を通して呼吸する。

外からだろうか。キンモクセイが花を咲かせる季節に、こんなふうな、ふっと、風にのって香

りがよぎるが、それに似ている。

「なんか……いいにおい、する……」

どこからだろう。少し頭がぼんやりしてきたのは、眠気のせいだろうか。土曜日だったから一日忙しく働いて、千葉まで慣れない運転などしたことだし。

まるで自分の身体が蜜にでもなったように、とろんとした心地。

二ナに吐息でそっと「瑞生」と呼ばれて、瑞生はまぶたをゆっくりと上げた。

二ナの顔、近い——そう思ったとき、くちびるに柔らかな感触を受け、心臓がどくっと大きく軋む。

二ナにキスされていることに気付くのと同時に、甘いにおいが少し濃くなった。

愛を感じるやさしいキスだ。

「……ん……」

くちびるをくすぐられ、軽く食まれて、瑞生は目を瞑った。

あんまり気持ちよくて。抵抗とか拒否なんてものが、この世から消えたみたいに、キスを享受することしか頭にない。

上くちびるをちゅうっと吸われたら、まるでいつもそうしているように口を開いてしまう。

「……ん、ふう……」

くちびるの内側の粘膜を二ナに舌でなぞられて、瑞生は胸を大きく上下させた。

呼吸が速くなる。歯茎の隙間に舌が滑り込んだだけで背筋が震え、瑞生は思わず手を伸ばして何かを掴んだ。

——二ナ……。

二ナの腕だ。縋るみたいにぎゅっと掴むと、二ナにゆっくりと身体を引き寄せられる。

二ナがもののけたちにマッサージを施すのを横目で見ると、ぼくもさわりたいな、とずっと密かに思っていた。その二ナの手指が、瑞生の身体をやさしい強さで抱擁してくれる。二ナにふれられたところが、ふにやりと弛緩してしまうくらい気持ちいい。

くちづけあう間も、あのよく分からない、いいにおいが辺りに漂っている。

「……はあっ……、ん……」

息を吸うタイミングで、二ナの舌が深く瑞生の中に入ってきた。

「……ふ、う……」

「ん……」

舌下も、頬の内側にも、二ナの舌先は最初遠慮がちにつついて、抵抗がないと知ると大胆にざらりとなでてくる。

深く浸食され、頭の芯までとろとろに溶かされるよう。

舌の表面がこすれあう。そのまま縋れて絡み、歯でくすぐられる。

耳朶や耳孔をまさぐり、髪をなでてくれる二ナの指。抱き寄せてくる腕。におい。ぜんぶが。

——すごい……気持ちいい……。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>